

うちら風雲一派のものでして ■ ■ ■ ■ ■ 。

萩山

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

東京に鎮座する風雲一派。

構成員は全てが喰種であり、それなりの武力を持つ組織。

組織トップである風雲誠一郎は自分の事をちよつと強い一般喰種と称している。

そんな彼が様々な人と出会い、物語は進み始める。

目次

静けさ	10
一波乱	5
日課	1

日課

傾いた太陽に橙色の空。

この区に来てから俺の日課となっている喫茶店あんていくで過ごす日々。

最近では常連扱いしてくれ、俺の好きな豆を選んで挽いているようだ。

大人しい20区こごでは俺たちが普通の人として過ごすのも珍しくはない。

珈琲を一杯飲み干し、一息つく。

「誠一郎さんおかわり必要？」

「ありがとうトーカーちゃん。頂くよ。」

彼女は霧嶋きりしま董香とうか店内でこそ愛想のいい可愛い子だが、慣れていない相手が仕事以外で出会うとここまでの笑顔を見せてはくれない。

まあ、難しい年頃なのだ、と勝手にわかった気になっている。

「はい、おかわりの珈琲ね。」

俺の目の前に置かれた珈琲からはほろ苦い匂いが漂っている。笑顔でこう接してくれる当たり、嫌われてはいないのだと思いたい。

「誠一郎さんどうせ暇でしょ？この後付き合ってよ。」

「人を一方的に決めつけて…。まあ暇だからいいけどね。」

俺は時々彼女に頼まれる事がある。

ニツと眩しい笑顔を向けて喜ばれても嬉しくねーぞこんなにやるめ。

「それで？高校はどんな感じなの？」

「またそれ？」

そう。だいたいトーカーちゃんとの会話はこれ。

今日はどんなことがあったか、こんなことが楽しかった、テストの結果がどうか、くだらないようで大切な話。

くだらないからこそ、大切だと思っている。

彼女には親がない。

彼女は知っているか分からないが近くで見守ってくれる肉親はこ

ここで働く四方蓮示ただ1人。

あとは出ていったアヤトくらいだ。

四方もそこまで人との会話が得意な方ではない。

勝手かもしれないが俺はトーカちゃんの事を少し年の離れた妹のように思っているのだ。

彼女がどう思っているかは知らないが、彼女がいつか新しい家族、家庭を築いた時に家族としてのコミュニケーションがちゃんと取れるお母さんになって欲しいと思っっている。

それこそ勝手なエゴなのかも知れない。

「今日の手合わせだつて手加減してくれよー。おじさんもう歳で疲れちまう。」

「まだ25のくせに。」

そう、彼女が頼んできたのは手合わせ、特訓だ。

強くなるうとすること、強くあろうとすることに反対することは無いが、何故そこまで強くあろうとすることなのか…。

大体はアヤトのせいだと思っはいるのだが。

彼女が俺に特訓を頼んできたのは、ちょうどアヤトが出ていった時期と重なる。

俺が彼女の思いにとやかく言うのも野暮だ。

「女子高生からしたら十分おっさんだろうよ。」

「…そうなのかな。」

そうだとも、と俺は返しておく。

「あ、誠一郎さん知ってる？…リゼのこと。」

「ん？ああ、最近静かだな。別の区に移動でもしたのかな。」

すこし考えるフリをしてトーカちゃんは「手合わせの時に話す」と言っ仕事に戻っしまった。

もう少し、喰種の情報に過敏になるか…。

リゼ…。神代リゼという女性の喰種。

色々な区に渡っは暴食を繰り返す厄介者。

かつて俺らの組も奴の搜索に当たったことがある。

結果は敗北。下っ端が多くやられた。

残された俺、幹部、下っ端でまた勢力はぶり返したが、あまり奴に
関わりたくないというのが本音。

そんな奴が大人しくなったのは何故だ？

死んだ、か別の区に移動したか…。

別の区に移動つてのは別にトーカちゃんなら普通に言えるだろう。

前者：か、はたまた別の理由があるのか。

「おまたせ。始めよ。」

「準備運動しとけよ。」

「はい」と素直に体操しだす彼女が微笑ましい。

動きやすい服装に着替えてきた彼女と俺は軽い準備運動を済ませ
向かい合う。

急激に間合いを詰め蹴りを繰り出すトーカちゃんを片手で受け止
め押し返す。

体勢を崩したと思ったが、回転をそのまま裏拳を放ってくる。

左手で受止め、そのまま後ろへ投げ飛ばす。

彼女が着地をする前に足祓いを仕掛け転ばせに掛かってみたがさ
すがに

躲されてしまった。

「今日こそは一本とるよー！」

「どうだかね。」

体勢を立て直したトーカちゃんに再び詰め寄り蹴りを放つ。

彼女はそれをしゃがむことで避ける。

そのままアツパーを繰り出そうとした彼女の腕を掴みあげ、終了の
合図をだす。

「はい。終わり。」

「誠一郎さんちつとも本気出さないんだもん。」

あまり本気を出していないのは事実だが、それはトーカちゃんとして
同じだろう。

俺も彼女も赫子は出せるし、そうなる勝負は変わってくるかもし

れないからな。

「それで？リゼの事って？」

「それなんだけど……。」

彼女から語られたのは鉄骨落下事件で二人の人物が被害にあったということ。

その片方が夕食になるはずの人間の青年、そしてもう1人がリゼだったという話だ。

そして死んだ神代リゼの臓器を移植されたその青年は喰種となっていた、か。

「トーカちゃん。またその青年に関して何かあったらすぐに連絡して欲しい。俺の番号は知ってるよな。」

「……でも私あいつのこと好きじゃない。」

少し不貞腐れた様子の子のトーカちゃんに頼むと言つて了承を貰うが、

「じゃあ、また今度付き合つてよ。」

「また特訓か？」

「今度はちゃんとした服着て駅前集合ね！」と言い笑顔を向けてくる。

常にこんな元気な愛想のいい子だったら良かったのにな、と思いつつ了承してしまう俺はやっぱり彼女に甘い……のかもしれない。

一波乱

あれから俺は特に変わった日常を送るでもなく今日もあんでいくで珈琲を啜ろうと思う。

さて、珈琲をと思い周りを見渡すがトーカーちゃんの姿がない。

今日は居ない日だったか？

「やあ、風雲くんいつもありがとうね。」

「芳村さんの珈琲美味しいんでそりや毎日来ますよ。」

芳村さんの入れる珈琲は本当に美味しい。ここに通う喰種も人も見る目があるな…いや、この場合舌が肥えていると言っても言うのか？

ああ、そうだ。この際にトーカーちゃんのこと聞くか。

「今日トーカーちゃん居ないんですね。」

「そうだね。今日は四方くんと一緒に食料調達に行ってもらう予定だからね。」

食料調達、あんでいくでその言葉を指す行為は自殺した人間を回収する行為を指す。

そうか、そういうえば彼女が出払っている時は大体食料調達だけ？

また明日だな。

「そうだ…丁度いい。聞きたかったことがあるんですよ。」

「風雲くんが私に聞きたいことは、珍しいね。」

どこまで俺の考えを読んでいるのかは知らないが、おやおや、とお爺さんらしくこちらを見つめる芳村さん。

どうやら質問には答えてくれるような雰囲気。

「神代リゼの死とともに現れた片目…隻眼についてですよ…。」

「君にしては情報が早いね…。基本的に行き当たりばつたりの風雲くんにしてはとても珍しい。」

そこまで珍しいことは知らなかったな。

やれやれ、と肩をすくめる芳村さんは優しく告げる。

「まだまだ人のお客さんがいるからね。閉店後にまた来なさい。」

まだ昼間だ。この一杯でも終わったら少し外をまわることにしよ
うかね。

「そうします。珈琲おかわり貰えます?」
やっぱりもう一杯だけ飲んでからにしよう。

暇潰しにと思つてぶらぶらと宛もなく彷徨っているが、今俺の頭に
あるのはリゼのことばかり。

別にあいつに特別な感情がある訳では無い。

むしろ関わりたくないくらいだ。

あまり干渉したくはなかったが…。

リゼのこととついでに調べたいのは隻眼の喰種…いや、半喰種か
な。

20区ここではなるべく騒ぎを起こさないように徹していたが、どうも嫌
な予感がする。

あまり遠くない未来に大きなことが起きそうな予感が。

「ま、どうにかするさ。」

そう、どうにかする。

行き当たりばったりで、即座に解決してやる。

俺は予知者では無いし、占い師でも、哲学者でもない。

嫌な予感だが、退屈しない気もする。

はは、楽しませてくれる…。

俺が少し思考の海に沈んでいる間にトーカーちゃんから着信が入る。

「風雲だ。トーカーちゃん、何かあったか?」

『誠一郎さん。話してた半喰種が——』

なるほど。これはお手並み拝見…かな?

「すぐ向かう場所は。」

トーカーちゃんの情報通り目指すのでしょうか…。

西尾錦ね…。

ここの区の中にしては力をつけている喰種だな。

半喰種くんのことにも気になるし、しばらく様子見してから乱入する
とするか…。

指定された建物の屋上にはトーカちゃんが携帯を片手に一点を見つめていた。

喰種の聴力があるからこそ聞こえる戦闘音、おそらく彼女がいる場所からは見えるのだろう。

「トーカちゃん。彼らはどんな感じなんだ？」

「どうって想像してる通りだと思うよ。」

「やっぱりか。」

喰種になったばかりの赤ん坊のような半喰種くん、彼が西尾錦に勝つなんて、兎が蛇に勝つような者だと思っている。

ああ、でもここには勝ってしまう兎もいるか…。

まあ、とにかく、無理だと思っている。

「あ、」

トーカちゃんは少し驚いた表情をして彼らを見つめていた。

俺も続いて彼らを見るが、そこに写るは赤、赤い爪リゼの赫子が西尾錦を貫き、滅多刺しにする光景。

「本当にリゼが使われたのか…。」

「ちっ、胸糞悪い。」

さて、参戦しますか。

恐らくは飢餓状態。

食欲のままにここら一体を荒らされたらたまったもんじやないからな。

「彼には半分でもリゼが居る。…トーカちゃんは見てなよ。特訓の先生のちよつとした実戦をね。」

「…無理しないでよ…。」

はいはい。と手を振り彼の前へと降り立つ。

ダラダラとヨダレを垂らしながら倒れている人間に近づいていく彼はブツブツと呪詛のように何かを呟いている。

「おいおい、その半喰種くん。…飢餓状態は辛かろう。どれ、お兄さんが治してやるから——」

さっさとかかってこいよ。

「グ、ガア、アアア!!」

獣のように雄叫びを上げ赫子をこちらに伸ばしてくるが、その赫子はリゼの物より一回り細く、動きも拙い。

飢えが本能で動かしているのか。

「ほれほれ、動きが単調だぞー。」

グウアと変な声を上げ睨みつけてくる彼だが、遂に遠距離による攻撃をやめ、急に間を詰めに入る。

人間からはとてつもない速さなのだろうが、まだ喰種からすれば少し早い程度。

今度は的確に腹を狙ってきたのだが、俺が避けることにより空振りに終わる。

そして無防備にも空ぶつた赫子を俺は自分の赫子で断ち切った。

言葉になっていない悲鳴が聞こえるが、こんなものさつさと意識を刈り取ってしまった方が早い。

怯んだ彼の後ろに周りを拳を振り下ろす。

すると悲痛な呻き声をあげ倒れ込む半喰種くん。

「終了…と。」

彼相手には赫子を使わないようにしようかと決めてたんだがなあ。予想以上に学習能力が高いのかもしれない。

まだ完全に使いこなせてはいないし、肉体も出来上がってない。

やはり、彼は赤子だ。

まだどんな風にも成長できる。

それこそ、何も無い力のない喰種になることだってできるし。

力を振りかざす捕食者にもなれる。

それは彼次第だな。

「お疲れ様、誠一郎さん…。」

いつの間にかそばに来ていたトーカーちゃんに声をかけられる。彼女に戦わせなくて良かった。

俺は無傷出終わったが、彼女だったら負けることはないと思うが怪我をしてしまうことだろう。

「四方さん、近くに来てみるみたいだから取り敢えずあんていくまで連

れていこう。」

「あいわかった。」

ゲロまみれの青年と半喰種の青年。

西尾錦は…置いてくか。

今回は自業自得ってことでな、まあ、奴だっでここで終わるようなやつじゃない。

しぶとくどこかで生きることだろう。

「誠一郎さん…。」

不意に先導していたトーカちゃんが振り向き、俺は「ん？」と少し間の抜けた返事をする。

彼女は明るい笑顔を浮かべ、

「お疲れ様。」

もう一度俺に労いの言葉をかけるのだった。

それは少し傾いた太陽と被さり、眩しく美しいものだった。

静けさ

件の元人間。

彼は金木研と名乗った。

やはり彼は大食いの晩御飯になるはずだったのだと彼の話を聞くと思えてくる。鱗赫の喰種である神代リゼが鉄骨程度でくたばるのだろうか。

確かに鱗赫の喰種は体が柔い。…だがそれを補う再生力がある。

頭部を切り離されたとしても再生する喰種もいるのだ、弱い喰種ならわかるが力のある神代リゼが死ぬとは到底思えない。

「…誠一郎さんお代わり持つてきたよ。」

「…ん、ありがとうトーカーちゃん。」

俺がどこまで頭を働かせたとして答えは出てこないだろう。

結局考えるのを辞め、トーカーちゃんが持つてきてくれた珈琲に手を伸ばす。軽く鼻に近づけ匂いを嗅ぐが豆を変えたのだろうか。いつもより甘い香りが珈琲から漂う。そして、味も違った。

果物を思わせるフレッシュな酸味に豊かなコクもある。

俺が珈琲に口をつけたのを確認すると彼女はまるで花のように笑った。

「誠一郎さんっていつも『ブルーマウンテン』でしょ？たまには別のもいかなって『グアテマラ』にしてみたんだけど、どう？」

さらに何か言いたげにこちらを見つめ、笑みを浮かべるトーカーちゃんにこちらもつられて笑顔になってしまうな。

「すごく美味しいよ。ありがとう。…ところでこの珈琲はトーカーちゃんが入れたの？」

「…もちろん！」

嬉しそうに笑う彼女にいつも勇気づけられる。

もう二度とトーカーちゃんが傷つかないためにも俺がいるのだとも思っていた。

「あつ、風雲さん。」

あの時はお世話になりました。と礼儀正しく腰を折るのは金木研、

今喰種の間で話題の中心にいる男だ。

彼は人畜無害という言葉をもとに人畜無害の形にしたような人物でこれといった特徴のない普通の大学生だ。

現在は『あんていく』にてバイトをしている。

「やあ、カネキくん。もう慣れたかな？」

「ええ、大変なこともありますけど、何とかやれています。」

喰種の生活、喫茶店でのバイトの両方を聞いたつもりだったのだが、彼はバイトのことについて答えたようだ。

苦笑いしながらトーカーちゃんを見るカネキくんは彼女は怒ったかのように睨む。

「は？アンタなんでこっち見んだよ？」

仕事に戻れ、と言うふうには右手をシツシツと払うトーカーちゃんに思わず笑ってしまう。

良かった。思ったよりも仲は良さそうだ。

「…ちよつと誠一郎さん笑わないでよ…。」

「ははは、ごめんごめん。」

少しムツとしながら訴えるようにこちらを見るトーカーちゃん。

「思ったよりも仲が良さそうで安心したよ。」

「…仲良くなんかないよ…。」

そういう彼女は目を逸らしてしまった。

やれやれ、どうしてこうも彼女は俺や喫茶店の従業員、客に対してきちんと礼儀正しいのに、彼に対して辛辣なのだろうな。

「…じゃあ今すぐとは言わないから仲良くしてやってくれ。」

「…うん。」

少し拗ねちゃったみたいだ。

そんな彼女を笑顔で見つめていると急に思い出したかのように口を開く。

「あつ、そういうえばヒナミ来てるよ。会いたがってたし会ってあげて。」

ヒナちゃん来てるのか。

ヒナミも言うのは父親がいない、自分で人を狩れない喰種の女の

子。

名前は『笛口雛実』

歳は14…だったかな。

度々母親『笛口リョーコ』と『あんていく』を訪れては肉を受け取っている。

「そうなんだね。この1杯を飲んだら向かうとするよ。」

「ありがと。ヒナミも喜ぶよ。」

素晴らしい彼女は接客へと移って行く。

仕事用の笑顔を浮かべた彼女を俺はいつもより甘い香りのする珈琲を飲みながら眺めるのだった。

「ヒナちゃん？…今大丈夫かな？」

コンコン、とノックをし応答を待つ。

この扉の先には先程の話にでてきた『笛口雛実』がいる。

「…もしかして誠一郎さん？」

「そうだよヒナちゃん。…入ってもいいかな？」

「いいよ！」と子供らしい元気な声が聞こえてくるのを確認し、俺は扉を開く。

すると正面のソファに座り本を読んでいる少女がいた。

「やあ、ヒナちゃん久しぶり。」

「誠一郎さんも久しぶり！前来た時いないんだもん。」

トーカーちゃんとは違う、眩しいくらいにまるで汚れを知らないような笑顔。

俺の顔を確認すると本を閉じ胸元で大事に抱えながら駆け寄ってくる。

初めこそ警戒して近づいてこなかった彼女が少し手を伸ばせば届く位置にいる。

それこそ彼女が俺に心を開いてくれたということだろう。

俺も積極的に彼女にかかわらなければごうはならなかったということだな。

それに元々ならこういう性格の明るい子なんだろう。なのに父の死により閉ざしてしまった…とかな。

「今日も組の人達のこと話してくれる?」

「風雲のことなんか知ってて楽しいの?」

「もー、誠一郎さんっていつもそれ聞くね。」

ヒナちゃんはいつもうちの事聞きたがる。

まあ、いいか。…さて風雲組はな…。

それから俺は彼女に組員のことを色々と話した。

どんな喰種がいるか、どんな役割があるか。

様々なことに興味を持つ彼女の相手をするのは大変だった。

拳句の果てには組員になりたいという。

無理だ。承諾できるはずがない。

トーカちゃん同様彼女を危険な目には合わせられないからな。

「もう帰っちゃおうの?」

「組のみんなも待ってるからね。また来るから大丈夫だよ。」

少し寂しそうにするヒナちゃんの頭を撫で別れを告げる。

何故だろうか…嫌な予感がする。